

## ずいそう

## 越後雑感

徳田尚志



東京生まれの東京育ちが、北陸新潟の地に暮らすようになってから、はや7年の月日が経たんとしている。新潟に着任して疑問に感じたこと2点。

一つ目は、新潟県は北陸地方なのかということ。

名刺でご挨拶すると、「あれ、新潟は北陸なんですか?」と、異議を唱える方が、多い。特に、富山、石川、福井各県の方々にとっては、新潟県は北陸三県ではないのである。

北陸本線は滋賀県米原から直江津までであり、新潟駅は信越本線、上越線のターミナルである。電気は、北陸電力より供給を受けている富山、石川、福井の各県と異なり、東北電力より受電している。確かに何か変な気はしないではない。北陸の冠をつけた企業も新潟県には少なく、富山県、石川県に多い。

しかし、我々建設業においては、まぎれもなく、新潟県は北陸である。何故なら、国土交通省北陸地方整備局及び日本道路公団北陸支社は、新潟市に所在するし、金沢市に所在する農林水産省北陸農政局は、新潟県も管轄している。

また、歴史的にみても、五畿七道の一つ北陸道は、若狭・越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の七ヶ国なのである。

次に疑念を抱いたのは、何故信濃川は信濃川なのだという事。

信濃の国長野県で千曲川と呼ばれていた大河が、越後の国新潟県で何故信濃川と呼ばれるのか、釈然としない。かつて、戦国の世においては、常に敵対視していたであろう国名を、地域の母なる大河の冠にすると、越後人のなんたる寛容さであろうか。元来、河川の名称は源流地域の名、または流域地域の名をつけたであろうから、不思議は無いのだが、それなれば長野県において呼称が変わるのは、いかなる理由があったのか。不可解ではある。

そこはともかく、まずは郷に入らば郷に従えという有難い先達の言葉を実践し、住めば都という境地にならねばならぬ。そのためには、まず地域を知らねばとの理由と、また運動不足の解消も兼ねて、朝の散歩を日課とすることと、暇を見て里山を登ることとした。

散歩においては、信濃川の堤防（やすらぎ堤という

や海岸まで足を伸ばしたが、快適に歩けたのは11月までであり、4月に再開するまでの間ただひたすら体重を気にして過ごすばかりであったのだが。

里山のハイキングは、社内に呼びかけ同好の士を募ったところ、10人ほど集まり、早速ハイキング同好会を結成した。

第1回は、足慣らしとして初心者コースである田上町の護摩堂山と決め、6月の上旬に登った。紫陽花の名所という幹事のふれこみであり、そちらへも大きな期待をもって274メートルの山頂をめざす。1時間ほどの心地よい汗で、無事頂上に到着した。しかし、道中も頂上も紫陽花はまだつぼみであり、幹事は参加者の大きな非難を浴びる事となり、面目丸つぶれ。山頂での豚汁、煮込みうどんは格別の美味しさで、他のハイカーを大いに羨ましがらせた。また、帰りに立ち寄った日帰り温泉で、手足を思い切り伸ばし、登山と日頃の疲れを取るのには、まさに温泉天国越後ならではの醍醐味であった。この鍋料理と温泉は、我がハイキング同好会の山行の定番メニューとなっている。

その後、日本国・笹川流れ・櫛形山・大峰山・角田山・弥彦山・鋸山・八海山・奥清瀬・尾瀬ヶ原・山古志の棚田・松乃山の美人林…等に脚をのぼしてきた。その都度、四季（正確に言えば、春夏秋の三季）折々の自然に巡り合い、木々の芽吹き、新緑、素朴な山野草、野鳥のさえずり、紅葉そして落葉、ほんの少しではあるが、越後の豊かな自然を楽しんできた。

天候に恵まれた日に眺望できる佐渡島は、まさに手に届かんばかりであり、越佐海峡は川の如く見えてくる。信濃川がゆったりと蛇行し、豊かな沃野が越後の平野を覆っている景観は、目をみはるものがある。

そんな越後の風土が、昨年幾多の自然の脅威にさらされた。被災された方々が、速やかに元の生活に戻れることをお祈りしたい。それとともに、荒れた大地が、我々の人工的な災害復旧作業以上に、自然の治癒作用により元のみずみずしさ、豊かさを取り戻す事を願ってやまない。